

# 哲学研究

第六百三号

西谷啓治と田辺元

林 晋

始めに

本論文の目的は、西谷啓治と田辺元の哲学理論の關係性を指摘することである。西谷と西田の哲學の關係は、多く論じられてきたが、西谷と田辺の哲學の關係は、私を知る限りでは、殆ど議論されたことが無い。その兩者の關係を議論しようというのが、本論文の目的なのである。

本論文の基本的主張は、西谷の空の思想が、田辺の種の論理の思想の裏返しの様な構造を持っており、その様な構造的な意味では、西谷哲學は、意外にも、西田哲學より、むしろ、田辺哲學との關係性が深いということである。勿論、その關係とは、否定的なものではある。別な言い方をすれば、西谷の「空」は、田辺の種の論理への「反論」になっているのである。

田辺についての西谷の回顧「田辺先生のこと」〔西谷一九九一A〕によれば、田辺と西谷は、西谷が昭和七年に京大文学部講師となったところから、家族ぐるみで交流するようになり、昭和二〇年夏に田辺が北軽井沢に引きこも

るまで、この交流は続き、その間、この二人は盛んに議論を闘わせた。

その議論の様子は、並大抵のものではなかった。京都学派のメンバーたちが、盛んに議論を行ったことは、よく知られている所だが、おそらく、この師弟の議論は、その中でも、最も激しく、また、盛んに行われたものではないかと思う。田辺、西谷の人柄からして、その様な議論が、ただ、議論のための議論で終わったとしたら、それは不自然でさえあるだろう。

また、久野収が「鎧を着た人」と評したように、謹厳で、人を退けるような所がある田辺だったが、西谷との関係は例外的に親密だったようで、特に西谷から見た田辺は、西谷から見た西田より、はるかに近い存在だったのである。西田と比較され易い西谷だが、実は、人間的コンタクトとしては、圧倒的に、西田より田辺に近かったのである。そして、この人間的コンタクトが、京都学派の中でも際立って濃密な学問的コンタクトを伴っていたと、私には思えるのである。

そして、そのコンタクトとは、先述の「田辺先生のこと」で、西谷が述懐したように、時として、田辺が西谷を「仮想西田幾多郎」と想定して議論する、その様なコンタクトだったのである。その様なコンタクトが、西谷の様な鋭敏な人物に何らの影響も残さなかったとは考え難い。

西谷の空の思想は、その「精神」においては、田辺の思想より、彼が畏れつつ敬愛した西田の思想に近い。このことは、改めて論じる必要はないであろう。しかし、その理論的構造においては、西谷の空の思想は、むしろ、田辺の思想に近いのである。

五重塔と、五階建てのビルと、平屋の庫裏、これらを比べれば、日本の寺院建築という意味で、五重塔と庫裏が「近い」と我々は感じる。しかし、その構造が近いのは、五層という意味で、五重塔と五階建てのビルなのである。その様な構造的類似性という意味で、西谷の空の思想と、田辺哲学は近いのである。そして、以下に歴史資料

を使って実証する様な、極めて濃密な人間的コンタクトの内に、田辺からいつの間にか受けていた影響を、少なくとも最晩年の「空と即」を執筆した時の西谷は自ら認識していた可能性さえあると、私は考える。

田辺と西谷の哲学理論の關係は、京都学派研究においての盲点となつてゐるように、私には見える。そのことを、思想史の手法で指摘し、今後の京都学派研究の糧としたい。それが本論文執筆の私の意図である。

## 一 本論文の背景

私が、本論文で紹介するような、西谷と田辺の思想の關係を考えるようになった理由は、あえて単純化して言えば、田辺研究などを通して知つた西谷と田辺の個人的親密さと、西谷の深い田辺理解、この二つ、特に後者に対する驚きであつた。本論に入る前に、これらについて簡単に説明しておきたいと思う。

周知の様に、田辺は気難しい人物で、なかなか簡単に他人と打ち解けるような人ではなかつた。しかし、その田辺が心を開いた例外的な人たちが何人かおり、その中で最も親しく、その關係を特筆すべき人物が西谷だつたと思われる。この両者の親密さは、同時代人には明らかだつたはずだが、いつしか忘れ去られ、西谷が何度となく、それについて書いてゐる割には、注目されて来なかつたように思える。

しかし、私が「林二〇一二」で指摘したように、田辺哲学が、新カント派マルブルグ学派的な意味での数理哲学であつたことを、最も良く理解してゐたのが、数理哲学には、縁がないといえる西谷だつたのである。西谷は、「田辺三元全集」第十三巻の解説で、ハイデガーと田辺の詩論を比較して、前者は、詩人たちに寄り添うような詩論であつたのに比べ、後者は、あくまで数理の立場から生まれたような詩論であると指摘してゐる。そして、また、田辺晩年の問題作「数理の歴史主義展開」を、もつとも田辺らしいと評したのも西谷だつたのである。

田辺元の思想を研究してゐた私が、西谷に興味を持った最初の契機は、この様な西谷の田辺理解の他にみられな

い深さを知ったことであつた。私が、種の論理の進化に数理哲学が強く関与してゐたことを理解できたのは、京大文学研究科田辺文庫の書籍への田辺の書き込みを調査したからである。その書き込みを見れば、田辺が、種の論理の初期の思想を、数理をヒントにして展開したことは明らかだつた。しかし、その様な出版されていない史料なしで、種の論理に数理哲学が本質的に関与してゐたことを理解することは難しい。

田辺は、社会哲学である種の論理の論文において、数理哲学的議論を長々と論じた後に、数理が種の論理の展開を指導したと書いている。つまり、種の論理を数理哲学が先導したと公に認めている。これは直観主義数学という特異な数学を展開したオランダの数学者、ブラウワーの連続体論が、種の論理を先導したという意味なのだが、田辺は、出版された論文では、ブラウワーの連続体論の説明さえ行つておらず、そのため、出版されたものだけから、ブラウワー連続体論が、種の論理を先導したという事実を理解するのは、実際には不可能、少なくとも非常に困難である。

繰り返しになるが、私が、それを理解できたのは、田辺を「先導した」と思われる数学の書籍と、それへの田辺の書き込みを、京大文学研究科図書館の田辺元文庫の悉皆調査により偶然発見したためであり、その様なエビデンスなしに、出版されたものだけから、田辺の思考の本質を理解できるとは思えない。

それにも関わらず、その事実を、数理には疎かつたと思われる西谷が、誰よりも良く理解してゐたということ、私には驚きであつた。その故に「林二〇一二」に、田辺哲学は「数理哲学」であり、そのことを最も良く理解してゐたのは、西谷であつたと、驚きをもちつつ書いたのである。

私が、そう書いたことについての、唯一の反応は、同僚の杉村靖彦氏からのものだつた。杉村氏から、面白いことだ、しかし、それだけ田辺の数理哲学的性格を理解しながら、西谷が、その方向に全く興味を示さなかつたのは何故かという問題が残る、と指摘されたのである。

実は、この指摘は、廊下で偶々合った際の、軽い会話として行われたものだったのであるが、この様な視点で、この問題を考えたことがなかった私には、新鮮なショックであった。しかし、その時点での、私の杉村氏の疑問への回答は単純なものだった。数理は、西谷の興味の範囲になかったはずだ。それが、杉村氏の疑問への答えであった。

実際、西谷は、数理に興味がないだけでなく、数理に疎い人物だったのでないかと思う。「空と即」で、西谷は隣接する二つの部屋の関係を基にする相互的連関の説明をし、その上で、それが三部屋、四部屋に拡張されるとした。その際、例えば三部屋の場合、部屋の形が三角形になると議論しているのである。これは奇妙な議論で、もし、三部屋の相互的連関を考えるときに、その部屋が三角形でないといけなかつたら、基本の二部屋の場合には、部屋は二角形ということなる。しかし、二角形などというものは存在しない。数学を少し知るものならば、西谷の議論の奇妙さに直ぐ気が付くはずである。西谷の数学への感覚が、これから推し量れる。

この様な次第で、数学者が数学をするときの数学者の心の動きなどの議論はしているものの、西谷にとって、数学は縁がない、ほとんど興味のないものだったのでないかと思う。そして、西谷の哲学は、右に示した数学への無理解が、その価値を全く減じない、そういう種類の哲学だったことも明らかだろう。その故に、西谷は、親しさを感じる師、田辺の哲学の根幹は理解するものの、自分自身は、それに関心をもつことはなかったのだらう。杉村氏への回答としては、それで十分で、特に学問的な意味はないだらう、そう思つて、特に杉村氏に、この様な考えを告げることもなく、放置していた。

正確を期すために書いておくと、実は「空と即」での三角形の部屋の議論に気が付いたのは、これよりかなり後のことである。杉村氏からコメントをもらい、それに対して、西谷は単に数理哲学に興味がなかったのだらう、と考へた時点では、私は西谷の思想を真剣に調べるほどの興味はもつていなかつた。

ところが、京都学派研究とは別に長年続けている数学の近代化の研究で、論理学者クルト・ゲーデルの一九六〇年頃の「自然科学は発展して原爆やテレビを作れるようになったが、本質からは、ますます遠ざかりつつある」という議論の背景にできる、体系化された近代化論を探していたところ、さまざまな経緯を経て、西谷のニヒリズム論に行きついたのである。私は、西谷の鋭い議論に驚き、これこそが求めていたものだと考えた。そして、西谷の哲学そのものに興味を持つようになり、ニヒリズム論を中心に、何回か西谷関係の特殊講義をも行った。

その際、「空と即」まで足を延ばすことになったが、ここでは、最近の集合論史で重要視される、初期集合論の発展における伝統論理学の役割り、と連動するような論理学についての記述があり「西谷、一九八七A 一二六一七頁」、さらに興味を覚えた。

そして、西谷のテキストを読み進むうちに、奇妙な既視感に陥ったのである。後で詳しく示すが、大谷大学講義で、西谷が描いた回互的連関の図が、私が長年翻刻と分析を行っている昭和九年の田辺元の講義準備メモ、つまり、種の論理が、それから誕生した特殊講義のメモの図と同じ形だったのである。西田の昭和九年の「信濃哲学会のための講演」にも類似の図があり、これらは、ともに西田からの影響とも考えられるが、田辺、西谷のものは、西田の図より関連性が高いように見えた。

さらに注意すると「空と即」の回互的関係の「定義」に種の論理の初期バージョンの中心概念「分有」*teilhaben* がでてくるし、種の論理のテーマを連想させる議論・用語が色々と見られた。

これらのことを知って、私は、この西谷、田辺の哲学の「類似性」を比較するという構想を持つようになり、さらに藤田正勝氏の勧めで、それに西田の「非連続の連続」も加え、この三者の「存在論」の比較研究を構想し、特殊講義を行ったり、講演を行ったりした。

残念ながら、西谷、田辺の哲学の背景である西田の哲学をも含めた、三者の関係論は、私の西田理解が十分でな

いたために、未だに納得できる形になっていない。

しかし、そうこうしている間に、私は頼まれて西田幾多郎の一家が、大正元年から一一年まで住んだ京都市左京区田中上柳町の家の解体・保存の活動を行うようになった。その経緯と顛末は、「林・市川二〇一六」にまとめた通りであるが、そこでも書いたように、この家について知るために、私は、この家についての言及を求めて、月報などの多数のエッセイを調べるようになり、その結果、京都学派内の人間関係が、哲学の内容を中心に理解されている現在のものとは、実は、かなり異なっていたのではないかと思うようになった。

特に、京都学派四天王などという呼称もある西谷の世代の哲学者たちと西田の距離が、現在広く理解されているものより、かなり遠いらしいこと、西谷と西田の距離は、この世代の哲学者としても、特に遠く、人間関係でみれば、西谷と近かつたのは、西田ではなく田辺であったことを理解するようになった。

これらのことから、私は、「林・市川二〇一六」で、哲学のテキストだけで、京都学派内部の哲学理論の関係を議論する傾向が強い、現在の研究方法だけではなく、哲学者・思想家たちの人間関係の理解をもとに、京都学派という集団を理解するという研究方法を提案した。そして、本論文は、私自身による、そういう方法論で、京都学派の二人の哲学者、西谷啓治と田辺元の哲学の関係を論じる最初の論文なのである。

その結論を一言でいえば、西谷の空の哲学は、西田の思想に強い憧憬と共感を持っていた西谷の、西田に代わつての田辺の哲学、特に種の論理に対しての「反論的な批判」と解釈できる、というものである。

以下、このことを、西谷の空概念を巡るテキストの分析と、西谷、大島康正が書き残した田辺についてのエピソードなどを分析することにより示す。まずは、西谷と田辺の親密な人間関係の話から始めよう。

二 京都から北軽井沢へ ― 田辺と西谷の議論 ―

京都学派を、西田幾多郎、田辺元、西谷啓治、という三者の系譜で理解する時、西谷が西田に対して強い尊敬・憧憬の念を持ち、西田についての多くの著作があること、また、西谷が仏教的方向に強く近接したことなどから、西谷と西田の哲学の距離が近く見えることは当然であろう。

また、田辺哲学が、絶対否定に基づく絶対弁証法をその基本に置く「否定の哲学」あるいは「対立の哲学」であるのに対し、西谷の「空」の思想が、相互的關係により、あらゆる事物の間の「壁」が透明・透過となる「無対立の哲学」であることから、西谷と田辺の思想は、その方向が一八〇度異なることも明白である。

また、西谷が田辺を語るときに、自分を田辺の弟子とし、田辺への尊敬の念を表しながらも、西田哲学への田辺の誤解を語るなど論調に、どこかシニカルな雰囲気漂っている様に感じってしまうのは、筆者の僻目のためだけではなからう。

ところが、哲学理論の内容ではなく、人間的関係で考えると、この三者の関係は大きく違つて見えるのである。私が「林・市川二〇一六」で指摘したように、西田と西谷の人間的関係は、必ずしも親密なものではない。西谷は西田を深く敬愛し、また、尊敬したが、むしろ、その故にか、西谷の西田への距離は、案外遠かつたのである。そして、これに反して、西谷の田辺への人間的距離は非常に近かつたのである。西谷は「田辺先生のこと」〔西谷一九九一A 二八六頁〕で、次の様に書いている。

西田先生はむつかしいところがあつたが大きな感じがして、長年接してもこわい思いから抜けきれなかつた。田辺先生は謹厳そのもののうちに神経質なところがあり、西田先生がヘーゲル的なのに対しカント的で、



私にはこわい感じはしなかった。

この西谷のテキストが示唆するように、打ち解けての交友関係が殆ど無かつたと思われる田辺にとつて、西谷は例外的に親しい人物のひとりだったのである。この親しさは、ひとつには西谷と田辺の夫人同志の仲が大変に良かったことが理由だつたようである〔西谷一九九一A 二八五頁〕。もし、それだけならば、この二人の關係に特に注目する必要はないだろうが、私には、この個人的な親密さが、少なくとも西谷の哲学の内容にまで「否定的」あるいは「弁証法的」に影響していると思えるのである。私が、そう考える根拠のひとつに、次に紹介する田辺への西谷の言及がある。西谷が、思想的に大きく異なる戸坂潤と、無二の親友であつたことは良く知られている。その戸坂について、戸坂の全集の月報のために西谷が書いたエッセイで、西谷は、次の文の傍点部分で田辺に言及している。

授業が終つて街へ出る時でも、休みの日に散歩がてらあちらこちらと出掛ける時でも大抵は一緒であつた。そして互いの下宿先きでも、散歩の途中でも、しょっちゅう何か哲学の議論をしていた。

(中略) 今までの私の生涯のうちで、田辺先生とを除いては、彼と一番多く議論したのではないかと思う。そしてその田辺先生とのディスカッションの場合でも、先生の面会日に戸坂と同道して行き、昼すぎから夜おそくなるまで論ずるといふことが多かつた。〔西谷啓治一九六六〕

西谷が「大抵は一緒であつた」と書いている「彼」が、戸坂潤のことである。また、傍点は筆者による。引用全体から、西谷が、それこそ四六時中といつてよいほど戸坂と哲学の議論をしていたことがわかる。しかし、傍点の

部分の様に、それでも田辺と比較すると、田辺の方が多く議論したと読める文章なのである。

この文章が言及している戸坂との議論は、学生時代のものであり、後に戸坂は東京の法政大学に就職するために東京に去り、一方で、西谷は京都に残り、昭和七年に、京大文学部講師として田辺の同僚となった。つまり、戸坂と田辺と、西谷が議論した時期は異なる。西谷は「田辺先生のこと」〔西谷一九九一A〕で西谷と田辺の人間的關係が、家族ぐるみの付き合いになったのは、彼の京大文学部講師就任の時からだと書いている。それは、戸坂が京都を去り東京に生活と仕事の拠点を移した昭和六年の翌年のことである。

そして、その頃から定年退職した田辺が京都を去るまで、西谷は、あたかも学生時代の戸坂との議論の様に、田辺と盛んに議論を闘わせる様になったと思われる。その議論の様子をうかがわせるのが、昭和一九年に定年退職をした田辺が、戦火を避けるためもあり、翌年七月に、群馬県北軽井沢大学の夏の別荘に居を移した際、京都から北軽井沢までの長い道程の間、田辺と西谷が議論し続けたという大島康正の目撃談〔大島一九九二〕である。

太平洋戦争末期の混乱の時期に、京都から北軽井沢への長い道程を、当時としては老夫婦と言えた田辺夫妻だけで移動することには無理があつた。そのため、二人ほどが同行することになり、田辺の副手であつた大島は当然ながら同行者に決まつたのだが、もう一人として、西谷が、自分が行くと手をあげたという。

大島によれば、このころの田辺は、一日の大半を寝て過ごすほど体調が悪かつたにも関わらず、田辺は、同行した西谷と、京都から北軽井沢までの道程の間、哲学の議論を絶え間なく続けた。この老年と壮年の二人は、田辺の山荘についてからさえ、その議論を続けて、若い大島を驚かせたのである。

大島の京都から北軽井沢への移動の説明にある、「まったく一日がかりの大移動であつた」〔大島一九九一 三三一頁〕や、田辺の山荘に到着してからの自らの様子として「でも何とかがんばって山荘に辿り着いた。そして途端に朝からの緊張が急にゆるんだせいか無性に眠たくなった。先生の書齋でいきなりごろりと横になって寝ころんで

しまった。」〔大島一九九一 三一二頁〕を説くと、あたかも京都から北軽井沢への旅程が、一日の中で行われたかの様に感じられるのであるが、これは勿論、大島が半世紀近く前のことを正確に思い出せていないからである。

この昭和二〇年七月という時期の国鉄は、特急は皆無、急行も日本全国で一往復のみ、名古屋から塩尻への中央線の列車も一日四本のみという状況だった。そういう時期に、一日で京都から群馬県北軽井沢大学村で移動することとは全く不可能であった。その旅程を当時の時刻表「東亜交通公社一九四五」を元に推測すると、東海道線で京都から名古屋へ、そして、名古屋から中央線で塩尻への移動が夜汽車であり、その旅程は、一日ではなく、車中泊を含む二日に渡るものであったろうことがわかる。

実際、群馬大学の田辺元文庫に収蔵されている日記（史料番号二二〇九〇五二、田辺文庫手帳（四五））には、昭和二〇年七月二五日（水）の記録として、午前十時に出発するはずの汽車が、空襲のため、午後二時になつて到着し、翌二六日（木）の十時ころ、北軽井沢に到着したと記されている。この十時は、おそらく午前十時のことであろうから、二十時間程の旅程である。

当時、まだ、二八歳の青年であつた大島だが、田辺夫妻や、その荷物の世話で、身心ともに疲れ果て、田辺の山荘について、思わず寝てしまい、それから覚めたとき、また、西谷と田辺が、京都から続く哲学の議論を続けていたことに驚いている。

また、大島は、岐阜当たりの駅で、駅舎が米軍の焼夷弾で炎上しているのを目撃して、それに気を取られたが、その時に、田辺と西谷が「しやうがないという表情をちらりと見せられたあとは、先ほどの哲学の話の続きに打ち込まれた」とも書いている〔大島一九九一 三一二頁〕。

これが、戸坂以上に田辺と議論をした、自分の人生で最も議論をした、という西谷の追憶の田辺との議論の様子なのである。

西谷は、自分は田辺の弟子だと思つてゐるのに、田辺が自分を西田幾多郎の代わりとして議論を仕掛けて来ることがあり困つたとも書いてゐる。

田辺先生は西田先生の弟子だと思われがちだが、実際はそうではない。学問上の議論がいささか感情的なものになり、お二人が疎遠になつてきたのは、私が三高の専任講師のころであつた。私は田辺先生の弟子でもあるのに、田辺先生は私を西田先生の代わりに議論されるというようなこともあつた。そのようなとき私は、自分は自分だと思ふよりほかなかつた。〔西谷一九九一A 二八六頁〕

この様な、西谷と田辺の議論が、西谷の哲学に影響を、全く与えなかつたと考えるには無理があるだろう。

他人を寄せ付けないようなところがあつた田辺が、例外的に西谷には親密であり、一方で、学問上では「敵対」してゐたといえる。ただし、大島の目撃談が物語る両者の「敵対」は、感情的なものがあつたと西谷が書いてゐる。西田と田辺の「敵対」とは全く異なり、飽くまで、学問は学問、親交は親交、という様なものだつたのだろう。西谷の公職追放に田辺が心を痛め、それが解けたときに大変喜んだことがわかる書簡が残されてゐるように、田辺と西谷の心の交流は、この両者が北軽井沢と京都に遠く離れた後も続いたようである。

先ほど、西谷の田辺評に何かシニカルなものが見えると書いたが、これも実は、西谷の田辺への近さを示すものだと考えることもできるだろう。つまり、その時代においては、多くの日本人より、ヨーロッパの文化に接する機会を多く持つた、この二人は、日本的なウェットな関係を超えて、ヨーロッパ的な、学問は学問、人としての交わりは、それとは別、というドライな意味での深い親交関係にあり、その故に、西谷は、師の一人と仰ぐ田辺を気軽に批判することができたとも考えられるのである。

そして、私には、この様な西谷と田辺の關係が、西谷の哲学の内容に影響を与えていると思えるのである。その事と、その理由を史料的な証拠を示しつつ以下に論じる。西谷は、自身の哲学への田辺哲学の影響について書いたことは、私が知る限りではない。その意味では、以下の議論は、あくまで私の推測に過ぎないので、それが妥当か否かは、読者の判断に待ちたいと思う。実際、この推測が絶対に正しいと、主張するだけの自信は、私にはない。しかし、西谷哲学と田辺哲学との直接の關係を考えるということは、京都学派の思想の系譜を考察するとき、重要であることだけは、自信をもって強く主張できる。

繰り返しになるが、私が主張する、西谷哲学の田辺哲学への「近さ」というのは、この二つの思想が似ているということではない。むしろ、それは一八〇度反対、裏返し、ポジとネガの關係にある。しかし、ポジとネガほど「近い」ものは無いとも言える。ポジがあればネガを、ネガがあればポジを再現できるからである。

以下の議論では、この様な意味での「近さ」を、西谷が用いた用語や、彼の空の概念の構造と、田辺の種の論理の用語や構造との比較を通して示す。そのために、まず、比較の際に使う局所的構造と大域的構造という考え方の説明から始め、そして、それを用いて、相互的關係と空という二つの概念の發展史の分析を行う。

### 三 局所的構造と大域的構造

西谷と田辺の思想の比較に使う、「局所的構造」という言葉の形容詞の部分である「局所的」という言葉は、「大域的」という言葉と対となって、数学や物理学、工学などで良く使われる。田辺が、西田哲学は積分的であり、自分の哲学は微分的だとしたことは有名だが、大まかに言ってしまうと、その積分的が大域的に、微分的が局所的に対応する。

本論で、西谷の空の思想に田辺哲学との関連を見るのは、主に、この「局所的」なもの、「局所的な構造」ある

いは「局所的構造」においてである。これは、比較対象の一方の田辺哲学が、局所的、微分的に組み立てられているためにそうなるのである。

この大域的、局所的という言葉は、理工系ではよく使われる言葉ではあるが、「哲学研究」の読者の方たちには、必ずしもなじみ深い言葉ではないかもしれないので、ここで、例えを使って、その意味を説明しよう。

日本列島がどの様なものか説明するとき「日本列島は、北から北海道、本州、四国、九州という主なる四島と、その他の多く島々からなる。そして、その主要四島は、海底トンネルや吊り橋などで、すべて繋がれている」と説明するのは、日本列島の大域的な説明である。

これに対して、「本州と九州は、関門トンネルと、関門橋により、繋がっている」というのは、日本列島を構成する本州と九州の關係性の局所的な説明である。

大域的と局所的の使い方は、この様なものであるが、以下で、西谷の空と田辺の種とを比較するとき、田辺哲学が、微分的なものを志向する以上、局所的性格が強く、それと西谷の哲学と比較するとすれば、この二者の哲学の、局所的な構造の比較が中心となるのだが、種の論理にもテンソル場という大域的と呼べる構造があり、それを、西谷の「空の立場」での、空の説明と比較することになるのである。

さて、局所的、大域的の説明は、ここまでとして、これを前提として、西谷と田辺の思想の「裏返し親近性」の分析に入ろう。そのために、まず、西谷の「相互的關係に基づく空の思想」の發展史から始める。

#### 四 空と相互的關係の發展史…その一「宗教とは何か」

本節と、引き続く二つの節で、西谷の相互的關係と、それに基づく空の概念の發展の歴史を分析・提示する。本節で、空と相互的關係が登場した「宗教とは何か」を扱い、次節が、一九六五年の大谷大学での講義「現代におけ

る宗教の諸問題」、そして、次々節で「空と即」を検討する。

西谷の回互的關係をもとにした空の概念は、著作集第十卷「宗教とは何か」「西谷一九八七」に収録された六篇の論文の内、第三論文「虚無と空」と第四論文「空の立場」で導入されている。

一冊の本としての「宗教とは何か」は、一九六一年に創文社から「宗教とは何か―宗教論集二」というタイトルで出版されたものだが、これは、同じ創文社から一九五四年から一九五五年にかけて刊行された「現代宗教講座」の第一、二、四、六巻で、それぞれ発表された四論文「宗教とは何か」「宗教における人格性と非人格性」「虚無と空」「空の立場」を第一から第四論文とし、さらに第五、六論文を書き足したものである。

「現代宗教講座」の四論文は、西谷が、単行本としての「宗教とは何か」の緒言に書いているように、第一論文を書いてみたものの、「それでは十分に意を尽くし得なかつたので、題を換えてもう一篇書き、それでもまだ収まりがつかないために、更に書き継ぎ」したものである。そのため、この一巻の本の中に、最初期の空の思想の発展史を見ることが出来る。まず、それから見て行こう。

西谷が彼自身の「空」について語った最初の論文は第三論文「虚無と空」である。そこでは、また、「回互」という言葉は登場しない。それが導入されるのは、第四論文「空の立場」でのことである。つまり、まず、第三論文で、大域的構造である空が導入され、その次の第四論文で局所的構造の回互的關係が導入されたのである。

この、第四論文において、空の立場は、自執的でない此岸の立場として説明される。そして、それに対比するものとして、プラトンのイデアやキリスト教の人格神が、彼岸の立場として批判される。たとえば、プラトンのイデアを、西谷は、次の様に批判している。

彼岸なるものが我々にとって絶対性をもって来るのは、今いったような場合に於いてであるとと思う。それに

較べれば、その他の場合には、彼岸はまだ絶対的ではない。例えば、プラトンがイデアの世界を此の感覚界の彼岸と考えた時、それは、地上の世界の彼方なる「高み」に天上の世界を考えるのにも似たような程度の彼岸であつた。それはいわば地上から垂直に仰がれた彼岸であり、地上のものに眼を奪われている日常平俗の生活からの単に九十度の転換に於いて成り立つような彼岸であつた。それは、地上に位置する者、そして天動説的な視覚に立つ者にとつては彼岸であろうが、併し天と地とが同じ場に成り立っているというに似たような、そういう場に位置する者から見れば、即ち空の場に立つ者から見れば、その彼岸はもはや彼岸ではなくなるだろう。「西谷一九八七 一一七—八頁」。

西谷は、同様に、キリスト教の人格神も「いわば天上から地上へ垂直に啓かれた彼岸である」として、これもプラトンの場合と同じく「九〇度の展開に於いて成り立つ彼岸」であるとす。さらには、虚無を地底の方向に向かう彼岸として、これら二例とは上下逆の方向にある彼岸であるとす。

そして、西谷は、空の立場を、この様な彼岸对此岸の上下関係のある世界観を超えたものとして、次のように説明する。

それは、天上の方向に於ける彼岸も、地底の方向に於ける彼方も、共にそのうちで成立し且つ表象され得るような、そしてそれ自身は絶対的に表象され得ないような（即ち絶対的に此岸であるような）、そういう場を与える当のものである。（中略）かく天上と地底との相反する方向に於ける九十度の転回を同時に包摂する場として、空の立場はいわば百八十度の転回に於いて現れるともいえる。「西谷一九八七 一一九頁」



そして、この引用に続く、文章で、後の「空と即」で登場する二つの部屋と、それを隔てる壁の例えを連想させる「紙の表裏」の例えで、空の場における転回が説明される。

それは、例えていえば、一枚の紙の表から裏へ出るのに似た転回である。それに比すれば、その他の場合に彼岸といわれるものは、イデアと感性的事物、神と人、存在と虚無との間に、それとしては如何に絶対的な距離が考えられるとしても、なおやはり紙の表面に刻まれた如きものということが出来る。「西谷一九八七 一九頁」

この文章の後、さらに西谷は、空の立場が徹底される時、空もまた空ぜられ、「空の立場はいわば三百六十度の転回に於いて現れる。表裏一体として現れる」と書いている。

右に引用した文章には、まだ、「回互」という言葉が現れない。しかし、「紙の表から裏へ出るのに似た転回」、紙の「表裏一体」は、明らかに、次に検討する第四論文「空の立場」で登場する回互的關係のことである。

その第四論文「空の立場」で、「回互的關係」は上下や中心というものが無い關係として、次の様に導入されている。少し長くなるが、重要な部分なので、略さず、そのまま引用する。

或るものが現に「有る」ということは、そのものが絶対的に独自だということである。世界に全く同じものが二つあることは出来ない。そして或るものの絶対的な独自性とは、それが他の一切のものの絶対的中心に位するということである。いわばそれが主の地位に位し、他の一切が従の地位に位するということである。併し、すべて「有る」ものがそういうものであり、「世界」とはそういうものの一切が一つに集まって成立して

いるということ、通常の思惟からすれば矛盾でしかない。それ自身他のすべてに対して主の地位にあるものが、どうして同時に他のすべてに対して従の地位に立つということが可能なのであるか。一切のもののそれぞれがその自体的な「有」に於いて一つの絶対的な自主性をもち、主の地位を占め、中心に位するとすれば、そこには全くのアナルキイ、全くの「混沌」が考えられるだけではないか。そしてそれは有の秩序としての「世界」とは全く正反対のものではないか。併しそういう疑問は、空の場を抜きにして、感性と理性との間に張り渡された通常の意識の場でのみ考えるからである。万有のそれぞれがその「有」に於いて絶対に独自でありつつ、然も一つに集まるということは、上に言ったように一切のものが互いに主となり従となるという関係であるが、そういう関係を「回互的」と呼べば、かかる回互的關係は空の場に於いてのみ可能である。「西谷一九八七 一六六頁」

この様に、回互的關係を導入した後、それと空についての議論を進め、第六節の最後の段落で次の様に書いていく。後で説明するように、これが田辺哲学の大域的構造との比較ポイントとなる。

ところで、そのようにすべてのものがその「有」に於いて互いに他のもとに入り、それ自身ではなく、然もそういうものとして、（即ち空の場に於いて）あくまでそれ自身であるという、そういう回互的關係そのものが、すべてのものを一つに集め結びつける「力」にはかならない。世界をして世界たらしめる力にかならない。空の場は力の場である。（後略）「西谷一九八七 一六九頁」

第六節は、この様に終わるのだが、この引用の最初の文に「他のもとに入り」という表現があることに注意しよ

う。実は、この表現が現れる以前、相互的關係にある二つのものは、互いに「支える」「立てる」「有らしめる」という風に書かれており、ここで初めて、互いに「入る」關係になる。そして、議論はさらに進み、第八節では、「相互的相入」〔西谷一九八七 一七八頁〕という言葉も使われるようになるのである。

ここで、これまでに出てきた西谷の空と相互的關係についての用語・概念を、先に示した局所的、大域的という言葉を使って分類してみよう。まず、空自体は、大域的なものである。そして、その空の場で可能となる二者の相互的關係は、居所的構造の説明で、門司と下関という二都市を、橋とトンネルが結んでいるという記述を挙げたように、局所的なものである。例えば、相互的關係では、その關係にある二者が、主であり同時に従である、という説明は、局所的なものだといえる。その一方で、すべてのものが主となり、その他のすべてが従となるというのは、これは局所的關係が全域に持つ關係を記述するものであるので大域的である。

また、主と従の關係というものは局所的としたが、主と従の意味が説明されておらず、その点においては、局所的な記述ではあっても、局所的構造の特徴を説明したものとはまでは言えない。むしろ、その後にてでくる、「支える」とか「入る」、「相入」などが局所的構造の性格を示唆する記述といえる。しかし、それは性格を述べるだけで、關係の構造まで述べているとは言えない。

では、どの様なものが局所的構造の記述と言えるのかといえば、「宗教とは何か」においては、相互的關係を、「紙の表から裏へ出るのに似た転回」とした記述、また、その表と裏を「表裏一体」とした記述であろう。しかし、これも、あまり明確なイメージを示す記述ではない。

これらに比べて、後年の「空と即」では、相互的關係は、分与する *mitteilen* と、分有する *teilhaben* という反対方向の二つの動詞により説明されており、局所的構造が、遙かに明瞭に記述されているといえる。それは、丁度、関門海峡での本州と九州の接続の局所的構造を、関門橋と関門トンネルという二つの道でつながれていると説明する

ようなものだからである。

では、西谷が、空の思想の局所的関係である回互的關係の構造を、最初に語ったのが、空の思想が最初にあらわれた一九五五年の二七年も後の一九八二年に発表されたテキストである「空と即」「西谷一九八七A」かということ、実は、そうではない。

西谷哲学についての議論では、あまり語られることが無いように思うが、単行本「宗教とは何か」の出版の四年後の一九六五年に行われた大谷大学の講義において、図も交えて、家庭内のコミュニケーションの話として、回互的關係が説明されているのである。次にこれを検討しよう。

##### 五 回互的關係と空の発展史：その二「現代における宗教の諸問題」

この頃、西谷はすでに京大を定年退官して、大谷大学の教授であった。一九六三年四月から一九七一年三月まで大谷大学教授であった間、西谷は、一九六五年年から定年退職まで、更には、その後、非常勤講師となっても、同じ「現代における宗教の諸問題」というタイトルで講義をしている。それらのほとんどが、テープレコーダにより記録され、テキストに起こされているのだが、その内の六〇回分が、著作集の二四巻から二六巻に収められている。後には、このテキスト化は、記録のための性格が強くなったそうだが、当初は、これは西谷が自身の講義の内容を確認するために作成されたことが、「西谷一九九二」の編集後記からわかる。つまり、著作集の大谷大学講義は、西谷自身の目が入ったものである。つまり、これは、彼の肉声を通して、その思想を知ることができる。しかも、それが正確に西谷の思想を反映している可能性が高い、大変重要な歴史資料なのである。

この講義録の内の一九六五年度、一月八日実施の第一五回講義「西谷一九九一 五五―六九頁」は、家族における存在と、そのありようを、家族内のコミュニケーションに注目して考察するものだった。その冒頭、西谷は、

家族を自然の関係であると同時に、自由の関係であるという。

自然の関係という事から言えば、生命、生、*life・Leben*という在り方がそこに含まれています。従って、家族というのは、有機的・*organic*な構造を持っていると言えます。他方、単に有機的な関係だけではなくて、家族の全体を構成する一人一人の人間が独立な一個の人間であるという事です。「西谷一九九一 五五頁」

「空の立場」で導入されたテーマが、家族というコンテキストで繰り返されているのは明らかである。そして、家族における自他の関係について、西谷は「その関係は、平面的な関係というものではなく、相互的な関係、昔の言葉で言えば回互的な関係とでも言えるようなものです」〔西谷一九九一 五八頁〕と言っているのである。

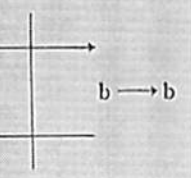


図1 大谷大講義の回互的關係

そして、著作集には、家族内の二つの存在、*a*と*b*にたいして、この二者の関係を示す図1が示されている(図1は著作集よりコピーした)。講義録は、極力編集をしないという方針で採録されたため

か、この図の説明はされていないが、西谷の議論から、これは二つの個*a*と*b*が、他者の壁に跳ね返され、ともに、個が個自身を映していく、*a*→*a*、*b*→*b*という*reflexive*な対自性をもちながら、両者の間の「壁」を超えて、自分自身を他に「伝達」することを表していると考えられる。この講義録には、もう一つ類似した図があるが、そこらは略す。

西谷は、「伝達」を最初、英語で、*communication*と呼び、それを伝達と呼び変え、さらに、それをドイツ語、*Mitteilung*に呼び変えて、この語の意味を次のように説明したのである。

そうじ一種の common・共同のと扱われる場が開かれて来るわけだ。個と個との間にそういう場が開かれないう communication という事はないわけだ。ドイツ語で言えは Mit-teilung という事だ。Mit- というのは com- 「一緒に」という事で、Mit-teilung というのは、「一緒に分かち合う」という事だ。一方では「分かち」という事で、その方向と同時に「共に」という事が一つに結びついてるわけだ。そういう事が同時に成り立たないと communication とは言えないわけだ。〔西谷一九九一 五九頁〕

同義語の communication の説明まで入れると、Mitteilung 分与の説明は、二ページほどにも及ぶ。その説明は、相互的關係が、家族の成員のコミュニケーションの問題に限定されているとは言え、「宗教とは何か」での相互的關係の説明に見事に一致しているのだ。この大谷大講義の相互的關係と Mitteilung の説明は、まさに、西谷の意味での空の局所的構造とみなしてよいだろう。そして、空という言葉さえ書かれてはいないものの、この家族内のコミュニケーションの説明こそが後の「空と即」の有名な部屋の例えの原型だろうと考えられるのである。

ただし、ここでは、まだ、「空と即」での mitteilen の対概念 *teilhabe* 分有は現れてない。図には、双方の矢印が描かれているので、その様なものを連想させるのだが、しかし、それは、a が b に mitteilen し、同時に、b が a に mitteilen している様子を表しているだけである。

次に、その「空と即」での空と相互的關係の分析に入るが、その前に、一つ、この mitteilen という言葉について、少し解説を加えておこう。西谷は、これを「分与」と訳しているが、これは誤訳といってもよい訳である。たとえば、独和辞典で、こういう訳が載っているものは、おそらくないはずである。mitteilen の通常の和訳は、西谷が、Mitteilung に対応する英語を communication だとしているように、「伝達する」「伝える」であり、それには「分」というニュアンスは全くないのである。

財産分与などと使われる「分与」に対応するドイツ語の単語は、分離を意味する接頭語をもった *verteilen* であり、西谷も言っているように、*mit* はむしろ、「分かつ」に反するニュアンスをもつ。なぜ、西谷が、この様な訳語を使ったのかは不明だが、既存の訳語への配慮だったのかもしれない。西谷が、哲学のコンテキストで、*Mitteilung* を「分与」と訳したのは、実は、この時が初めてではない。この訳語は、一九二七年刊のシエリングの *Über das Wesen der menschlichen Freiheit* の西谷による和訳「自由意志論」(後に「人間自由の本質」に改題、改訂)で、*Verteilung* を西谷が独自に訳した「配分」という訳語とともに使われているのである(後には「分割」という訳に変更されている)。

そればかりか、西谷は、シエリングが、*Mitteilung* と *Verteilung* をこの様に使い分けているかに、詳しい訳注をつけている[シエリング二〇〇二—一八七頁]。それによれば、*Mitteilung* 分与は、「自己の性質或いは力などを、それを持つていない他のものに伝えまた与えること」であり、*Verteilung* は、「元来均衡的狀態に統一されていた二つの力がその均衡を乱されてみずから分かれること」である。前者は、特に「神の持つ性質が、被造物の人間に分与される」という風に使われている。このことから、推測すると、通常の意味ならば、分与と訳するのが適切な *Verteilung* をシエリングが非常に特殊な意味で使っているために、それを「配分(分割)」と訳し、一般的な意味とは、これもいささか違つやり方で使われている *Mitteilung* を「分与」と訳したという可能性がある。シエリングの *Mitteilung* の使い方は、大谷大学講義や「空と即」での「分与」の使用法によく似た性格をもつので、それが、この不思議な訳語が使われた理由なのかもしれない。さて、訳語の話を終り、本題にもどる。

## 六 回互的關係と空の發展史…その三「空と即」

回互的關係と、それによる空の立場の最終的形態は、理想社から出版された「講座 仏教思想」の第五卷(一九

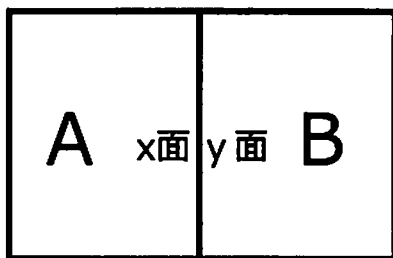


図2 「空と即」の部屋の例え

八二年)に掲載された論文「空と即」に現れたものとされている(西谷一九八七A 一一一―一六〇頁)。良く知られているように、この論文では回互的關係(この論文では「回互的連関」と書かれている)を、部屋の例えで説明している。それを図示すれば、図2の様になり、図1の大谷大学講義の家族の構成員aとbの間のコミュニケーションの図1を彷彿とさせるものとなる。図1の真ん中に書かれた垂直の線は、aとbが人であるので、壁ではないのだが、しかし、西谷は、図1の説明のところを書いてように、これを「壁」と呼んでいる。その部分を引用しよう。

aがaを映すという事は、bの中に映っているa自身を映すという形を取る。自分が自分に返るといふ事は、aがaをといふ事ではあるけれども、現実的には、他から跳ね返されて、他の壁にぶつかってそこから跳ね返されて、そして、自分が自分へといふ形を取るわけですね。(西谷一九九一 一五八頁)

二つの図の違いは、図1では、 $a \rightarrow a, a \rightarrow b$  という対自性が考慮されていること、そして、図2では、壁は、本当の壁なので、その壁の両面、x面とy面を考慮することができて、それにより、例えば、「x面はその『本質』において、Aに現れるBの表現であるとも言える。しかし同時に、Bの表現である同じx面は、A室の一部としてA室に所属する」(西谷一九八七A 一三三頁)の様に、AとBの「コミュニケーション」の形をより具体的に語るこ

とができる様になっていることである。そして、回互的関係の重要なポイントとして、これ以前の議論にはない、体相用を基にした回互的連関の局所的



構造の詳細化が語られ、その中で「分与」が言及され、そして、新しく、その対概念としての「分有」が導入されたのである。

一般に「限界」ということは、切断が接合でもあるという意味が含まれている。そしてその接合は、差別されたものの間の相互投射とか相互滲透とときに呼んだような連関としてなり立つのである。この様な構造を「回互的」と呼べば、回互的な連関の場合に重要なことは、一つには、本質的にAに属するものがBのうちへ自らをうつす（映す、移す）とか投射するとかして現象する時、それがBのうちでAとして現象するのではなくBの一部として現象するという点である。言い方を換えれば、A「体」がB「体」へ自らを伝達する時、それはA「相」においてではなくB「相」で伝達される。Aは自らをBへB相で分与(mitteilen)し、BもAからそれをB相で分有(teilhaben)する。これがBへの自己伝達というAの「用」である。「西谷一九八七A—三三三頁」

「ここでも「宗教とは何か」以来の「入る」にあたる滲透の様な言葉が使われ、また、大谷大学講義のMittelungが動詞の形で使われ、「分与」「伝達」などの訳語も、そのまま使われて、その構造が維持されるとともに、仏教の概念である体相用や、本来はイデア論の用語である teilhaben 分有を新たに導入して、回互的關係の局所的構造の説明が、より豊かになっている。

以上で、西谷哲学と田辺哲学の構造が裏返しになっていることを示すための、西谷の回互的關係を基にした空の思想の発展の歴史についての、私の理解の説明を終わる。この発展史は、あくまで、西谷と田辺の哲学の「裏返し」の類似性」を指摘するために考えたものであって、これが西谷哲学の発展史だということではないので、その点は誤

解しないで欲しい。この私流の發展史は、西谷が主張したかたはずの、彼の哲学のエッセンスとでも言うものは、何も入っていないに等しい歴史叙述なのである。それは西谷が、彼の哲学を乗せるために考えたプラットフォームとでもいうべきものの發展史である。それ故に、西谷の哲学の営みにおいては、本質的ではないものの、重要なもので、それ故に、それを基に田辺哲学との「裏返し（ウラガエシ）の類似性」について語れるのである。

さて、いよいよ、次節で、いままでの「發展史」を使い、田辺哲学との比較を行うが、それを始める前に、「空」と即（ツキ）で新たに現れた「分有」*teilhaben*という用語について、先ほどの *Mitteilung* の「分与」という和訳と同様に問題点を指摘しておこう。

この問題は、本誌の読者には、良く知られたことだと思いが、*teilhaben* というドイツ語動詞を、独和辞典で調べても、まず、「分有」という訳語を見ることはできない。これは専ら哲学、特にイデア論で使われる和訳であつて、「この赤い車が、赤のイデアを分有する」というような使われ方をする。しかし、通常の意味では、*teilhaben* は「参加する」、「与する」などと訳され、「相続した土地を兄弟で分有する」というような、通常の日本語としての「分有」を、これにあてるのは実に不自然なのである。しかし、「分有」という訳は、*teilhaben* を単に、*teilhaben* と二つのパーツに分けて、それぞれパーツを直訳した様な、稚拙な訳ではあるが、長い間使われ、すっかり定着してしまっている。その故、田辺も種の論理で、これを使っているわけである。先ほどの説には反するが、一九二七年頃の西谷も、*Schering's Mittelung* の使い方が、イデア論の *teilhaben* の反対向きの関係に似ているところから、これに「分有」にマッチする「分与」という訳をあてたという可能性もある。さて、言葉の問題は、これくらいにして、本論文の目的である、西谷と田辺の哲学の比較を始めよう。

## 七 種の論理の裏返しとしての回互と空…その一 大域的構造

西谷の回互的關係を基にした空の思想と田辺の種の論理は、その構造において裏返しに類似している。これが本論文の基本的な主張である。それを示すために、通常では、あまり議論しないような形で、西谷の哲学の構造的分析を行つてきた。これを使つて、田辺哲学との比較を行うわけであるが、まずは、比較的簡単な大域的構造の比較を行おう。

西谷が、独自の空概念を初めて提示した「空の立場」で、「そういう回互的關係そのものが、すべてのものを一つに集め結びつける『力』にほかならない。世界をして世界たらしめる力にほかならない。空の場は力の場である」と述べていることはすでに指摘した。

この「空の立場は力の場」という主張は、私の知る限りでは、「空の立場」にしか見られない主張であるが、大谷大学講義で、家族を結びつける、互いの心を開くコミュニケーションを回互的關係として説明しているように、「空の立場」より後の西谷の回互的關係も、自他を結びつける「力」と考えられないこともない。

しかし、西谷の思想は、ある意味で、自他の間の壁を保持しつつも、壁を透明化することにより、隔てを取り払う思想である。壁が透明化してしまえば、もうそれらを世界として一つにまとめるために、互いに引き寄せることも必要ないであろう。遠く離れている人も、距離という壁が透明化されて、すぐそこにいる人と同じになる。少なくとも、大谷大講義以後の晩年の西谷の思想は、その様な性格をもっている様に見える。つまり、「空の立場は力の立場」と西谷が考えたのは、おそらくは、彼の空の思想の初期のみ、「空の立場」のころのみだった可能性が高い。その後の西谷の空は、透明化による靜的な性格を強くしてしまうように、私には見える。その故、本質的に力学的であった、田辺の哲学と直接に比較できるのは、この時期の空のみである。

種の論理は力学的だと書いたが、それは田辺が、彼の種の説明に、静力学などで使われるテンソルの概念を使っているからである。そして、私が「林二〇二二A」で指摘したように、「論理の社会存在論的構造」で、田辺がテンソルに言及したとき、彼がイメージしていたものは、正確に言えば、剛体を引き裂こうとする力と、それに抗する力を記述する、応力テンソルだったと考えられるのである。

より正確に言えば、外からの引つ張りなどの力により生じる剛体内部の各点における力を記述する数学的形式は、各点にテンソルを連続的に張り付けるテンソル場と呼ばれるものである。テンソル自身は、各点に貼り付き、局所的な力のあり方を示すもので、それが剛体全体に貼り付けられ、また、連続に、さらには滑らかにつながってテンソル場になつて、つまり大域的な構造となつて初めて、剛体の中に働く引き裂こうとする力を記述できるのである。

数学的に言えば、テンソル場は、引き裂こうとする力の記述である必要はなく、押し付けようとする力の記述でもよい。しかし、テンソル場で、民族国家を理解しようとする田辺の目的のためには、それは引き裂く、力の記述であつたろうことは、「林二〇二二A」で説明したとおりである。

この種の力学的性格を説明するために田辺が持ち出した、引き裂くものと、その抗力としてのテンソル場は、西谷の「力の立場」としての「空の立場」と二重の意味で裏返しの関係にある。一つ目は、すでに、今までの議論で明らかだろうが、力の方向にある。西谷の空は、バラバラのものたち非連続のものたちを結び付けて、世界として一つの連続体にする、結びつける力であつたので、田辺のテンソル場と力の方向が正反対なのである。

そして、もう一つ、近接作用と遠隔作用の違いがある。近接作用というのは、剛体を押したとき、その力が、剛体の押した側とは反対側にあるものに伝わる、そういうコンタクトしているもの同士的作用のことである。一方で、遠隔作用とは、ニュートンの万有引力のように、遠く離れているもの間に働く作用のことである。一九世紀

と二〇世紀初頭の物理学は、遠隔作用を神秘的で不合理なものとして排除しようとする傾向があり、それを代替するものとして、場の概念が使われるようになった。遠隔作用を忌み嫌ったことで有名なアインシュタインの一般相対性理論は、その典型であり、その中で使われたのがテンソルという数学的仕組みだったのである。

すでに明らかであるのが、「空の立場」における、力の場としての空は、すべてのものがすべてのものに働きかけるものであり、万有引力のような遠隔作用的な性格をもっている。これは、すべての壁が透明化していく晩年の思想でも同じ様に見える。つまり、遠隔作用か、近接作用か、という点でも、西谷の空と田辺の種は正反対なのである。

すでに注意したように、また、この節の議論からも明らかな様に、田辺哲学は、基本的に近接作用的であり、その故に大域的な議論を行える余地が少ない。大域的構造の話は、ここまでとして、局所的構造での空と種の比較に話を移そう。

## 八 種の論理の裏返しとしての回互と空…その二 局所的構造

私が、田辺の種の論理と西谷の空の思想の関係を考え始めた切っ掛けの一つは、「空と即」において、「空」を支える形而上学的前提構造といえる「回互的連関」の説明に、田辺が種の論理の初期のバージョンにおいて中心にすえた分有 (Teilhaben) の概念が、それまでに既に使われていた、シェリング由来の哲学用語である分与 (Mitteln) と対の関係として使われていることを知ったことだった。

もちろん、分有は、言うまでもなく、西洋哲学の基本ともいえるプラトンのイデア論における、イデアと、その現実化がもつ双方向の相互関係の内、イデアのある現実化がそのイデアにもつ関係、例えば、赤い花が赤のイデアに対してもつ関係を表す際に使われる哲学用語であるので、西谷が「空と即」で分有を使ったからといって、必ず

しも田辺が意識されているとは限らない。しかし、「空と即」には、先に引用したように「一般に『限界』ということ、切断が接合でもあるという意味が含まれている」の様に、田辺を連想させる表現が多く含まれているように、私には感ぜられたのである。この文章は、明らかに、田辺が種の論理のシンボルとして繰り返し使った数学者デーデキントの「切断」を連想させる。田辺は、切断は「切れていて繋がっているもの」であるとしたのである。もちろん、これは西田の「非連続の連続」由来のものであるが、西谷の語り口は、私には西田でなく、田辺を連想させる様に見えたのである。このことを説明するために、ここで、少し田辺の切断について説明しよう。

古代のプラトンの分有概念は、二〇世紀になり、フランスの哲学者レヴィ・ヴリュールにより「未開人」が持つ、未だ科学化されていない思考法の特徴として「神秘的分有」*participation mystique*の名の元に復活して語られた。そして、それをドイツの哲学者マックス・シェーラーが吸収し、その知識社会学的基礎においたのである。プラントのイデア論の「分有する」という動詞は、ドイツ語では、英語の *take part in* (参加する) に対応する、*teilhaben* であり、田辺の昭和九年の特殊講義で、種の論理が開拓される際も、このシェーラー由来のドイツ語 *teilhaben* が使われている。

日記などの記載から、田辺は、これを、シェーラーから、レヴィ・ヴリュールへ、という順に理解したことがわかる。そして、田辺は、これを彼自身の種の論理の第一バージョン「社会存在の論理」で、個（個人）と、種（社会）の関係を表すものとして使ったのである。そして、後に、この関係は、数学者ブラウワーの連続体論を経由して、有名な田辺の切断概念を生み、その後、レヴィ・ヴリュール由来の分有概念が田辺哲学において使われることは無くなる。

そして、この切断と、それと重ねあわされていたと思われる、テンソルこそが、西谷の空と田辺の種の裏返しの関係を理解するキーポイントとなる。切断は、数直線を、ある一点で、左右二つに分けたようなものであり、これ

には、何らの力学的構造はない。ましてや、弁証法的・哲学的構造はない。しかし、私が「林二〇一二」で指摘したように、田辺は、この数学的構造に、力学や弁証法を読み込んでしまうのである。この様な、数理、物理に、形而上学を読み込んでしまうのは、新カント派マールブルグ学派や西田にも見られる方法論であるが、田辺哲学は、これが顕著であった。

例えば、大島康正が、「論理の社会存在論的構造」以後は、も、はやぎりぎりの田辺哲学である」「大島一九九一五三一頁」と書いた、一九三六年の「論理の社会存在論的構造」で、田辺は次の様に書いている。

無理数の切断は固定せられた直接存在でなくして、自己否定的なる種の矛盾的に対立する二つの契機としての有理数の反対方向をもつ系列を交互否定の無の底から行為に於て有に転じ、絶対否定の肯定に統一したものである。それは交互的に否定し合う絶対的に対立するものの統一として、連続の要素となるのである。その対立を統一する原理は絶対否定的統一性であるから、反対の間を張渡す基体としての種はそれに於て一たび絶対否定せられるのである。その絶対否定の底から肯定的なる統一が肯定的にはたらき出すのが個の切断に外ならない。基体の否定の底から主体が生れるのである。(三四六頁)

この様に「切断」は、種における個、あるいは、種に対する個、のシンボルなのである。

先に、西谷の大谷大学講義の記録として、その著作集に掲載されている相互的関係の図を示した。また、晩年の「空と即」の部屋の例えを、私が図にしたものを示した。田辺は、講義中、黒板によく図を書いたといわれており、実際に、戦後、北軽井沢で行われた法政大学の学生のための私的講義の記録には、田辺が示したであろう図が含まれている。しかし、「哲学研究」「思想」「理想」に掲載された、種の論理に関する一連の論文には図がない。

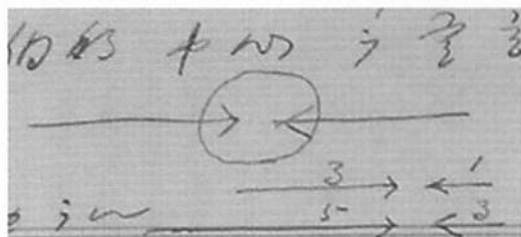


図3 1934年特殊講義メモから(1)

もし、右の「切斷」の記述を、西谷の回互的關係の図の様に図示したら、どの様なものになるだろうか。私は、それは図3のようなものになるのではないかと思う。実は、この図は一九三四年の種の論理の第一論文「社会存在の論理」が、それから生まれたとされる同年度の田辺の特殊講義「認識の形而上学」の講義準備ノート「田辺二〇一四」から採った図である。

この部分で田辺は、Lebenszentrum, Kraftzentrum, Dynamikについて議論しているが、その内容は、まだ明らかになってはいない。しかし、それは、「論理の社会存在的構造」で議論されたテンソルについての議論と関連したものと思われるのである。この一九三六年の論文で、田辺は、種のテンソルの性格について長い議論をした。それは種とは力の場であるという議論だった。左に引用したのは、その一部分である。

例えば引力と斥力、圧力と張力との如き交互態は、それが力のはたらく状態に保たれる限り、相反する原動と反動への力が互に否定し合いながら而も相両立し共存するのであって、若し一方が他方を否定し尽くせば最早力のはたらくは消滅し単なる運動が起るのである。而もまた斯様に共存するものが互に否定し合い相反封するのでなければ力は消失する。斯かる否定的対立と両立共存との直接なる統一であるから、それは運動の生起が無い限り即ち力の交互作用の均衡が破れない限り、表面上何等の変化が現われないけれども、それにも拘らず、力のはたらく合う空間即ち力の場は、常に極徹的仮想的なる運動の絶えず間断なく無限に生起せんとしては抑圧せられる激動の直接統一なのである。(中略) 実に力の場は錯動原因の互いに活動し抑圧し合う場所なのである。物理学者が数学的にテンソル量として力の場を、相反対し合う量の交互性の



ここで田辺が言おうとしていることを、もう、少し平易な言葉で説明してみよう。例えば鉄の棒を、その両端の方向に引つ張っていると考えてほしい。その時、棒の内部の各点では、引つ張る力がかかっており、同時に、それに抵抗する力が生じる。これが、「応力テンソル」という物理用語の意味での「応力」なのであり、テンソルというものは、この応力を記述するための数学的仕組みなのである。

たとえ引きちぎろうとする力がかかっても、鉄の棒が引きちぎられまいとする力と、それがつり合っている間は、一見、鉄の棒には何も変化がないようにみえる。しかし、さらに大きな力で引つ張ると、ある限界を超えたとき、鉄の棒は二つに破断してしまう。つまり、これが、鉄の棒が引きちぎられまいとする力が、引きちぎろうとする力に負けて、田辺の言う、「否定され尽くした」瞬間なのである。

そして、破断した瞬間、切れた棒の二つの切れ端は、もともとの棒の二つの端の方向に運動を始める。しかし、すでに棒の引きちぎられまいとする力が否定され尽くした後の、この運動は慣性運動なのであり、そこには、もう応力という力はないのである。

これが田辺が言いたかったことである。そして、図3の丸で囲まれた、二つの矢印は、この二つの力の釣り合っている状態を表しているのである。実は、現代では、もう使われないが、数学でベクトルを矢印 $\downarrow$ で表すことができるように、昔は、テンソルを釣り合う二つの矢印として $\downarrow$ と書いたのである。<sup>(5)</sup>

図3を、この様に解釈することが正しいことの一つの証拠が図4である。これは図3の直前の議論の部分で、矢印が角突き合わせている向かって左の図が図3のものと同質的に同じもので、それには「力(量)」と書かれ、向かって右の擦違う二つの矢印は「意(質)」と書かれている。本文での議論からすると、「意」は、意志のことであ

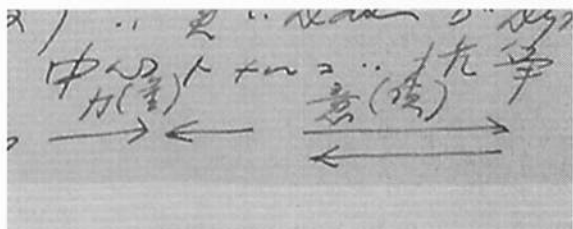


図4 1934年特殊講義メモから(2)

ろう。そして、これは、力が存在しない、慣性運動を表す二つの「擦違うベクトル」を表しているのである。

田辺の哲学は、否定の哲学であり、対立の哲学である。角突き合わず、対立するテンソルの矢印こそ、そして、それが発展したと考えられる切断こそ、それを象徴するものであった。これに反し、田辺が、真の世界記述にならないと考えた、お互いに抑圧しあうことがない、二つの擦違う矢印こそは、西谷の万物の間の関係が相互的關係として、すべてを開き伝達しあう、空の世界の象徴なのである。まさに、田辺の世界と西谷の世界は、裏返しの関係にあったといえるのである。

講義の際などに図を描くことが多かったという田辺が、西谷に、一九三四年の講義メモに書いた図を示しながら、自説を説明し、それを記憶していた西谷が、大谷大学講義の際に、それを思い出して、あるいは、無意識の内に、その記憶に突き動かされて、図1のような絵を描いたという可能性はゼロではない。

もし、図1と図3・4の符合が、無意識の内のものであったとしたら、晩年に至って、そのことに気が付いた西谷が、師が、その主要哲学を開拓したときに使った「分有」という言葉を、その相互的連関の説明に、新たに付け加えたのではないだろうか。

もちろん、これらは、西谷が書き残したものが以上、単なる、想像・夢想、あるいは、妄想の類である。しかし、西谷が描いた図1が、田辺が種の論理を準備した講義のために描いた図と奇妙な連動をしているのは事実である。そして、この様なことは無視したとしても、彼らの思想が、まさに裏返ししの局的構造をもつということが事実であることは、今までの説明でお分かりいただけたものと思う。

## 最後に

私は京都学派研究を続けているが、飽くまで歴史家であることに徹し、哲学・哲学史ではなくて、思想史的な研究を行っているつもりである。しかし、今回は、歴史学の領域を少々踏み外してしまったのではないかという気もしている。

しかし、そうしたくなるほど、西谷と田辺の哲学の關係は、私には裏返しに強いつながりに見え、また、それを説明することが、西田、田辺、西谷という、京都学派の系譜の説明に重要なのではないかと思うのである。

すでに述べたように、本論文の研究は、本来は、西田の非連続の連続も含めて、三者の關係論を目指すものだった。田辺の種も西谷の空も、西田の非連続の連続と同じテーマであることは明瞭である。残念ながら、私の力不足で、西田を含めての比較は、未だ十分には進んでいない。今後、この方向に、本論文の研究を拡張すべきだろうが、果たして、私に、それだけの哲学的理解力があるかどうか、あまり自信はないので、西田哲学に造詣が深い方たちのお教えを乞いたいところである。

最後に、この論文を書き終わる、一週間ほど前に発見した、史料「田辺二〇一四」についてのある事実を報告して、本論文を終わりたいと思う。私は、一九三四年の、この史料にある二つの図を、一九三六年に発表された「論理の社会存在論的構造」でのテンソルの議論と比較して、それが同じものだと言張した。この一九三六年の論文は、大島が、それ以後を「ぎりぎりの田辺哲学」と呼んだように、それまでの種の論理に比べても、思わず、その正当性を疑いたくなる、ある踏み込みが行われた論文である。

田辺は、この論文で、自然科学の基礎でもある論理学を、社会存在論から考えるということを宣言しているのである。それが、この論文のタイトル「論理の社会存在論的構造」の意味なのである。田辺は、この大胆過ぎる構想

を正当化するためにオットー・ノイラーの統一科学などを持ち出してはいるが、常識的に考えれば、これはあまりに無謀な構想である。

そのため、私は、最近まで、これを田辺が、種の論理を開拓していく中での、一種の勇み足、あるいは、彼特有の徹底性のために、そこまで踏み込まざるを得ない状況に陥つたためではないかと考えていた。つまり、一九三六年以後の種の論理は、その踏み込みにより、それ以前の種の論理とは、少し異質なものになったと考えていた。

そうであれば、この時、種の論理は変質したのであり、そうならば、一九三四年の図を、一九三六年の論文の記述で理解することには少々無理がある。しかし、テンソルに関して言えば、一九三四年の段階で、すでに田辺は、それについて考えをめぐらしていたと考えて自然なのである。その理由は、「林二〇二A」で指摘したように、彼のテンソル論の背景となつている弟子の佐藤省三のテンソル哲学が、一九三四年の「哲学研究」に発表されているからである。「佐藤一九三四」。

そして、本論文を書き終る直前、これに加えて「論理の社会存在論的構造」が、私が考えていたより、それ以前の種の論理との連続性が高いことを示すエビデンスが見つかったのである。それは、「田辺二〇一四」の二七頁右側の冒頭にある文章である。「林二〇一八」。なんと、そこで田辺は、種の論理の特徴は、それが社会存在論をもとに構築された、世界Weltをも対象にする論理であることだ、それが生の哲学やハイデガーの哲学、そして、Nichtsの哲学にない、種の論理の特色だとハッキリ書いていたのである。つまり、一見逸脱のようにみえる「論理の社会存在論的構造」は、種の論理が生まれる過程で、すでに意識的に用意されていたのである。一九三四年のメモが、この様に一九三六年の論文の内容を反映しているのならば、同じ史料中の一九三四年の二つの図が、一九三六年のこの論文の記述で理解できることは何の不思議もないのである。

注

- (1) 西谷自身は論文ではなくエッセイと呼んでいるが、ここでは論文としておく。
- (2) その一つ前の「宗教における人格性と非人格性」の最終部にも「空」という言葉は言及されており、これが、西谷が彼自身の独自の空の概念を考え始める切っ掛けだったのでないかと推測できるのだが、また、「空」が中心テーマにさえなっておらず、これは、また「西谷の空」ではなかったとみなすことにする。
- (3) 著作集では、この文の冒頭部分が「そこに一種の・common 共同的」となっているが、これは誤植と判断して変更した。
- (4) ただし、大谷大学講義では、コミュニケーションがなりたつには、共通の場が必要であり、それが相互的関係を倚うものだという意味に理解できる記述がある。これは西田の場所を強く連想させる記述である。
- (5) 田辺が絶対弁証法を「哲学通論」〔田辺一九六三A〕で彼の絶対弁証法を図で説明したときに、合を丸で囲んだが、矢印の二つの先端を囲む丸印は、おそらくは、それに対応するものだろう。

引用文献

- 大島康正 京都から北軽井沢へ、「田辺元 思想と回想」武内義範他編、筑摩書房、一九九一
- 佐藤省三 近代における自然の論理、「哲学研究」二、一九三四
- シェリング・フリードリヒ 人間的自由の本質(第三〇刷)、西谷啓治訳、岩波書店、二〇〇二
- 田辺元 田辺元全集 第三卷 カントの目的論、ヘーゲル哲学と弁証法、哲学通論、筑摩書房、一九六三
- 田辺元 田辺元全集 第六卷 「種の論理」論文集一、筑摩書房、一九六三A
- 田辺元 京都帝国大学文学部 田辺元教授 昭和九年講座「認識の形而上学」電子化画像、京都学派アーカイブ、二〇一四年四月公開開始、群馬大学田辺元文庫蔵、同文庫史料p. 二〇一四
- 東亜交通公社 時刻表 昭和二十年七月一日現在、財団法人 東亜交通公社 日本内地支社、一九四五
- 西谷啓治 戸坂潤の思ひ出、『戸坂潤全集』第五卷月報、勁草書房、一九六六
- 西谷啓治 西谷啓治著作集 第十卷 宗教とは何か、創文社、一九八七

西谷啓治 西谷啓治著作集 第十三卷 哲学論攷、創文社、一九八七A

西谷啓治 西谷啓治著作集 第二十四卷 大谷大学講義、創文社、一九九一

西谷啓治 田辺先生のこと、「田辺元 思想と回想」武内義範他編、筑摩書房、一九九一A

林晋 田辺の「数理哲学」、「思想」一〇五三号、岩波書店、二〇一一

林晋 深口昭平・中沢新一の多様体哲学について — 田辺哲学テキスト生成研究の試み(二)、「日本哲学史研究」、京都大学文学研究

科日本哲学史専修、二〇一一A

林晋、市川秀和 西田幾多郎田中上柳町旧宅について「哲学研究」六〇〇号、二〇一六

林晋 林晋ブログ 大雨の中、田辺演習、なんと、[http://www.blog.liv.ac.jp/entry/20180707\\_18](http://www.blog.liv.ac.jp/entry/20180707_18)、二〇一八年七月七日、二〇一八

(筆者 はやし・すすむ 京都大学大学院文学研究科教授・メディア文化学)